

縄文時代観の変化

2022年8月17日、明治学院大名誉教授（文化人類学）の辻信一さんが柳津町の宿坊・月本旅館に宿泊された。翌18日の朝に軽自動車で見学に行き、町内の遺跡等を案内した。私は辻さんにお会いするのは2回目で、前は昭和村大芦のカラムシ栽培農家（五十嵐良さん）を案内した。

この日は、遺跡巡りの後、柳津縄文館を視察し、長島雄一さんの説明を聞いた。

車中では世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」を見学されたことへの感想を述べられた。それは「豊かな縄文時代、ユートピアと思っていたが、実際に北海道の遺跡に立ってみると厳しい自然のなかにあった。とても厳しい1万年であったのではないかと、自分の縄文観が大きく変わった」という。

東北大から東北歴史資料館、文化庁、奈良国立文化財研究所に勤務された考古学者・岡村道雄氏は著作『縄文の列島文化』（山川出版社、2018年）で、次のように主張されている。それは

「学問的な時代区分である縄文時代は終わっても、縄文的生活文化、地域や都市と村、海や山などでの違いがあって、変質の程度もさまざまではあるが、昭和30年代からの高度経済成長、列島改造などまでは色濃く保たれていたことを強調したい」（7ページ）。

「人々の衣食住や墓制・信仰などの生活文化は、昭和30年ごろからの経済発展まであまり変化がなく、継続的・伝統的だった。例えば木と土（土木技術）で作った竪穴住居は地方では平安時代まで続き、煮炊きなどは炉・囲炉裏がつい最近まで続いた。衣類も野生の麻や綿を使い、食材も山野でとれた自然食材が奈良の都の市場でさえ、半分近くを占め、大陸系の野菜を凌駕していた。人々の墓も基本は土抗墓だった。つまり、文化を校正する要素を多様に設定して、文化の動態を総合的・複合的にとらえれば、多くの基層縄文文化にあったことが理解できる」（45ページ）。

現在の縄文通史として評価されている都立大の先史学の山田康弘氏の『縄文時代の歴史』（講談社現代新書、2019年）では、「定住生活の採用とともに、それを支える生業形態・集団構造・精神文化の発達、そして人を含めた資源交換ネットワークの発達、現代とは比較にならないほどの少ない人口下で継記・連鎖した」（321ページ）

「少ない人口下で定住生活を行い、食料のほぼ100パーセントを自然の恵みに依存していた縄文人には、そもそも自然と共生する以外のオプションはなかっただろう。そのように考えれば「自然と共生する」という発想自体がきわめて現代的なものであることにも気づくはずだ」

「縄文時代をある種の「楽園」「ユートピア」として語ろうとする論調の中では、しばしば「極端に少ない人口」という観点が抜け落ちている」「縄文人はお互いが支え合い、助け合って生きてきたという話が出されることもあるが、それは個人間に多少のあつれきがあったとしても、基本的にはいつの時代もいっしょで、縄文時代に限ったことではないだろう。過去に対する過度の美化には慎重でありたい」（323ページ）。

私たち奥会津に生まれ、暮らすものの日常は、過去の質素で飢餓を見越した貯蔵を優先したいとなみが日常であった。書面で残された江戸時代以降の飢餓、飢饉。そして日常にトチノミを利用したり、塩蔵した山菜や穀類を貯蔵した暮らし。それは生存のための基本的な行為であった。

金山町中川の渡邊良三氏は『金山谷風俗帳・解説解説』（1992年）で、文化4年（1807）に作られた奥会津の庶民の生活史・民俗誌の解説のなかで以下のことを記している。大沼郡金山谷四ヶ組とは、野尻組（現在の昭和村）、大石組（金山町）、大谷組（三島町、柳津町西山地区）・滝谷組（三島町）のことである。

「この『風俗帳』にかかっていることは、江戸時代の昔物語ではない。田畑に耕運機が入らない昭和30年代の初めまで、この『風俗帳』にある暮らしが農山村には連綿と受け継がれてきた。農業の間の男女の稼ぎがしかり、田畑の耕作しかりである。作物の豊饒と神仏の信仰、そして農民の食と娯楽といった三位一体の年中行事もしかりである」

「往事のカネモチとは、コメ・ミソ・タキギという暮らしの三条件の備蓄だった。日常は三年越し古米を食べ、玄関・通りの間という土間には塩舟の上に塩俵が五俵も積まれ、土蔵には数個の桶に味噌が満ち、屋敷には薪が幾棚も積まれている。家の構えとともにこれらの物が備蓄されていれば一見して「カネモチ」とみられた」

「出産した赤子も産後二十一日間、親類や近所の人々が集まっての「湯浴み」、、、、前近代的の一語で抹殺されるものだろうが、みんなに見守られて成長するという意味では素晴らしいことだった」（66ページ）